

機関番号：32670  
研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2008～2010  
課題番号：20520653  
研究課題名（和文） 戦間期フランスにおけるイタリア人政治亡命者のネットワーク形成に関する研究  
研究課題名（英文） The network making of the Italian antifascist exiles in interwar France  
研究代表者  
北村 暁夫 (KITAMURA AKEO)  
日本女子大学・文学部・教授  
研究者番号：00186264

研究成果の概要（和文）：両大戦間期にフランスで反ファシズム運動を展開したイタリア人権同盟の活動と、この組織の指導者の一人であったルイージ・カンポロンギの人脈を分析することにより、フランスにおける反ファシズム運動が党派間で激しく抗争しつつも、フリーメイソンによるつながりなどを利用して党派間の垣根を越えた人的関係を構築していたことや、スイス、ベルギー、アメリカ合衆国など様々な国に移民ないし亡命した人々との国際的な連帯を追求していたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the network of the Italian antifascist exiles in France, especially on the Lega Nazionale dei diritti dell'uomo (LIDU, the Italian League of the Human Rights) and its leader, Luigi Campolonghi. While the Italian antifascist exiles with the different political principles struggled among them, this organization attempted to overcome these differences and to promote the unitary antifascist movement in France by making use of the various social networks like as the Freemason. Moreover, they were always looking for an international solidarity with the Italian antifascist exiles in the other European countries, such as Switzerland, Belgium, and in the United States of America.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：西洋史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：移民 亡命 ネットワーク 反ファシズム フリーメイソン

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 冷戦体制の崩壊とグローバル化の進行により、多くの国で第二次世界大戦後に支配

的であった歴史認識に対する見直しがなされ、「歴史修正主義」の動きが台頭している。筆

者の主たる研究対象国であるイタリアもその例外ではない。第二次世界大戦後のイタリアでは、レジスタンスを通じてイタリア人自らがファシズム体制を打倒して戦後の民主主義国家を成立させたとする認識が支配的であった。だが、1990年代以降、レジスタンスに参加した人々は少数に過ぎず、国民の多くはファシズムを支持していたとか、イタリア人がファシストとパルチザンに分かれて戦ったという点でレジスタンスは「祖国の死」をもたらした、といった見解が登場した。こうした「レジスタンス神話」を否定し、ファシズム体制に積極的価値を見出す歴史認識に対して、レジスタンスに意義を強調する人々が反論し、両者の間で激しい論争が起きるにいたっている。この論争が、1990年代半ば以降、中道右派と中道左派に二分されるようになったイタリアの政治状況を反映しているのは明らかである。とはいえ、これを単なるイデオロギイ的、党派的な対立と捉えることは適切ではない。一連の論争を通じて、これまでの歴史研究が十分には扱ってこなかったファシズムやレジスタンスをめぐる諸問題が浮上している。歴史研究者には、こうした課題に対して、丹念な実証を積み重ねることによって新たな歴史像を提示することが求められている。

(2) 筆者はこれまで、イタリアからヨーロッパ諸国や南北アメリカに向かった移民の歴史を中心に、近現代世界における人間の移動の特色について研究し、移動に際して家族・親族や地域に基づく人的ネットワークが不可欠であることを指摘してきた。以前に科研費補助金の交付を受けた「イタリアからフランスに向かった政治亡命者と移民の生活世界をめぐる歴史研究」(平成15～16年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C))においては、ファシズム期にフランスに向かった「亡命者」に関する事例研究を行い、反ファ

シズム運動の指導者と民衆的出自の反ファシストたちのいずれもが、既存のイタリア移民コミュニティとの人的関係に依存することによって、移民先での生活を経済的に維持したことを明らかにした。

本研究は、これまでの研究成果のうえに、最初に記した問題意識を加味することによって構想された。従来の反ファシズム運動研究においては、イタリア共産党、イタリア社会党(最大綱領派)、統一社会党(改良派)、共和党、アナキストなど、運動を構成する諸党派の多様性と彼らの間の運動方針の不一致と反目が強調される傾向にあった(たとえば、Simonetta Tombaccini, *Storia dei fuorusciti Italiani in Francia*, Milano, Mursia, 1988 など)。いささか単純化して言えば、1930年代までの反ファシズム運動は低迷と失敗の歴史として描かれているのであり、1940年代のレジスタンス活動を華々しい成功として描く歴史叙述とは著しい対照をなしている。こうした反ファシズム運動像は、ファシズム体制が民衆の支持を得ていたとする「修正主義」の主張に一定の根拠を与えているように思われる。

このような反ファシズム運動像が描かれてきた背景には、これまでの研究が政治党派を主体とし、各党派を個別に分析してきたという事情がある。しかし、筆者による事例研究が示している通り、反ファシズム運動に従事する亡命者たちは、多かれ少なかれ既存のイタリア移民コミュニティと密接な関係を築くことによって自らの生存を維持している。そうした移民コミュニティを媒介にして、彼らは異なる党派の人々とも日常的に接触していたのである。各党派に関する個別研究では党派を超えた人的関係が視野に入りにくく、彼らの構築したネットワークの全貌は明らかにならないと言える。その点で、党派を超えた

反ファシストの結集を呼びかけたイタリア人権同盟とその中心に位置したルイーダ・カンポロンギの存在は注目に値するのである。

## 2. 研究の目的

ファシズム期のイタリアは、ファシストによる暴力や迫害を逃れ国外で政治活動を行う膨大な数の政治亡命者を生んだ。最も多くの亡命者が向かったのがフランスである。彼らはそこで政治党派や労働組合を再建し、地下組織への支援を通じてイタリア本国に影響力を行使しようとし、またフランスのイタリア移民を反ファシズム運動に動員しようとした。本研究は、これまであまり注目されてこなかったイタリア人権同盟という組織とその指導的存在であるルイーダ・カンポロンギに着目した。イタリア人権同盟は 1922 年にパリで結成され、共産党を除くさまざまな党派に属する反ファシズム運動の活動家たちが参加した。また、カンポロンギは、党派を異にするイタリア人亡命者たちやフランス人の有力政治家・知識人たちとネットワークを構築することで、ともすれば目的を見失って停滞しがちであった 1920 年代後半から 1930 年代前半の反ファシズム運動を牽引した。本研究は、イタリア人権同盟とカンポロンギを軸に据えて、その周囲に形成された人的ネットワークを解明することにより、反ファシズム運動の特質を新たな視座から解釈し、従来の研究が提示してきたものとは異なる反ファシズム運動像を提示することを目的とした。また、人的ネットワーク形成を促進したもう一つの要素として、カンポロンギをはじめ、多くの反ファシズム運動の活動家が加入していたフリーメイソンにも着目し、この組織と反ファシズム運動との関係を明らかにすることも目的とした。

## 3. 研究の方法

①イタリア人権同盟に結集した人々の人的ネットワークを解明するために、まず「反ファシズム連合」（フランスに亡命した社会党や共和党の人々がイタリア人権同盟などとともに結成した組織）の機関紙である『自由 La libertà』紙を主たる史料として、イタリア人権同盟の会員の氏名をリストアップした。次に、イタリア内務省の公安文書（イタリア国立中央文書館（ローマ）所蔵）に基づき、彼らの出身地、出身階層、所属する政治党派、フランスで従事した職業、活動地域などを調査した。また、ミラノの解放（レジスタンス）運動史研究所やパリの現代史国際史料図書館、同じくパリのフランス大東方会（フリーメイソン組織）文書館に所蔵されているルイーダ・カンポロンギの個人資料も参照した。そのうえで、収集したデータのプロソフォグラフィックな分析を通して、彼らの個別の人的関係を分析し、ネットワークの相関図を作成した。

②イタリア人権同盟会員で、フランス以外の国において活動を行った人物の氏名を特定し、リストを作成した。そのうえで、彼らとフランスで活動した人々との人的な交流について相関関係を特定していった。特に、アメリカ合衆国における活動の分析が中心である。史料として、アメリカ合衆国で活動していたさまざまな反ファシズム運動組織が刊行していた機関紙と、イタリア内務省の公安文書を利用した。

③最後に、フランスで活動するイタリア共産党の活動家に関して、活動地域を限定したうえで指導者層や媒介者層を抽出し、出身地、出身階層、フランスで従事した職業などを調査して、イタリア人権同盟と比較対照した。ここでも、主たる史料はイタリア内務省のこの文書である。こうした一連の作業を通じて、

イタリア人権同盟を中心とするフランス在住のイタリア人亡命者によるネットワーク形成の過程を明らかにするという方法をとった。

#### 4. 研究成果

(1) まず、フランスにおけるイタリア人権同盟の組織概要と活動の実態を把握するために、人権同盟の活動の中核を担ったルイージ・カンポロンギの人的ネットワークを明らかにし、そのネットワーク上に表れた人々の政治的・社会的特徴を分析した。基本的な史料として、2009年3月パリの現代史国際史料図書館と同年9月ミラノの解放（レジスタンス）運動史研究所での史料調査によって得られたものを利用した。

カンポロンギの遺族が保管していた彼宛ての書簡類（解放運動研究所所蔵）を分析すると、イタリア人によるとものとフランス人によるとものの二つのカテゴリーに大別される。イタリア人は戦間期に限定すると約30名を数え、いずれも反ファシストだが党派的には共和党、統一社会党（改良派）、社会党（最大綱領派）、独立左派、アナキストなど多岐にわたり、書簡が送られてきた地域もフランス各地に及んでいることが明らかになった。他方、フランス人も約30名を数え、メナール＝ドリアンやバッシュなどフランスの人権同盟幹部のほか、エリオ、パウルヴェ、ダラディエといった社会党や急進社会党を中心とした有力政治家の名前を数多く確認することができる。こうした政治家たちがカンポロンギと接触した時期は、彼らが閣僚としてフランス在住の外国人（とくに政治亡命者）の処遇を左右できる地位に就いていた頃にあたり、カンポロンギは自らを含めてイタリア人亡命者の地位保全のために尽力していたことが確認できた。

(2) 次に、フランスにおける反ファシズム運動とフリーメイソン組織との関連について分析した。イタリア人権同盟はフランスの人権同盟の働きかけによって結成された組織であるが、フランスの人権同盟はメイソン会員を非常に多く含む組織であり、イタリア人権同盟にも結成当初からメイソン会員が多く参加していた（ただし、フリーメイソンに加入していない会員も一定数存在し、人権同盟とフリーメイソンを実質的に同一の組織であるとみなすことは誤りである）。カンポロンギもイタリアでフリーメイソンに加入し、その後亡命したのちにフランスで設立されたイタリア人メイソン組織に加入している。フランスにおける反ファシズム運動を担ったイタリア人亡命者の諸党派のうち、とりわけ共和党と社会統一党（改良派）には多くのフリーメイソン会員がおり、カンポロンギはこうした人々との密接な人的関係によって、党派の枠組みを超えた反ファシズム運動の構築を目指していたことが明らかになった。また、当時のフランスにおける左派政治家の多くがメイソン会員であり、カンポロンギはフリーメイソンのネットワークを利用してフランスの有力政治家たちに働きかけていたことも確認できた。

(3) 次に、フランスに拠点を置くイタリア人権同盟とアメリカ合衆国におけるイタリア人（ないしイタリア系の人々）の反ファシズム運動との人的交流について、ローマの国立中央文書館に所蔵されている公安文書やアメリカで刊行された反ファシズム系の新聞などを史料として、調査・分析を行った。その結果、アメリカにおいて反ファシズム運動のメディア拠点となった『新世界 Il nuovo mondo』紙の周辺に集った亡命者たちと、フランスで人権同盟や反ファシズム連合に結集した亡命者たちは、政治的な理念や運動の

方法論において類似点が多く、両者はカウンターパートの関係にあったこと、両者は人的ネットワークを最大限に活用し、主としてフランスの亡命者たちがアメリカ合衆国を訪問するという形をとることにより、フランス側の人々は人的資源の不足するアメリカ側に人材を供給し、アメリカ側はフランス側に資金提供を行いながら相互の弱点を補強して、亡命先における困難な状況の克服を図ったことなどが明らかになった。

(4) 以上の考察を踏まえ、最後にイタリア人権同盟には参画することのなかった（むしろ 1920 年代には敵対していた）イタリア共産党員に関して、その政治的・社会的特徴を明らかにしたうえで、イタリア人権同盟会員との間で形成された人的ネットワークについて分析した。1926 年に反ファシズム諸党派が非合法化されてから、共産党は他の反ファシズム諸党派と同様にフランスを拠点に移して運動を継続した。フランスに在住するイタリア移民に対して積極的に働きかけたことによって、他の反ファシズム諸党派を上回る形で支持者を増やしていった。他の反ファシズム諸党派との連携を拒んでいた彼らが方針を大きく変えたのは、コミンテルンが人民戦線戦術を打ち出した 1935 年以降のことである。とくに 1937 年には反ファシズム諸党派を結集する場としてイタリア人民連合を結成し、機関紙『イタリア人の声 *La voce degli italiani*』を発刊した。この機関紙の初代編集長を務めたのがカンポロンギであり、彼が共産党との連携においても中心的な人物であったことを確認した。また、人民連合は共産党がイニシアティブを持つ組織であったものの、共和党や「正義と自由」のメンバーの一部も参加しており、反ファシズムの統一組織としての体裁を持っていたことがわかった。さらに、この組織の活動が主にプ

ロヴァンスなどフランス南東部で行われており、この地域に共産党にリクルートされた反ファシズムが多数居住していることが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- ①北村暁夫、スイスのイタリア移民と移民保護—19 世紀末から 20 世紀初頭を中心に、史艸、査読無、50 号、2009、110—138、
- ②北村暁夫、イタリア農村と移民—南仏への移民と「亡命者」、農業史研究、査読有、43 号、2009、3—13、
- ③北村暁夫、フランスにおけるイタリア移民の移動の実態とコミュニティ形成—19 世紀後半から 20 世紀初頭を中心に、史艸、査読無、49 号、2008、105—132、

〔学会発表〕(計 2 件)

- ①北村暁夫、戦間期における亡命イタリア人の国際的ネットワークと移民コミュニティ、日本アメリカ史学会 2008 年度大会シンポジウム (東洋学園大学)、2008、
- ②北村暁夫、イタリア農村と移民—南仏への移民と「亡命者」、日本農業史学会 2008 年度研究報告会 (宇都宮大学)、2008、

〔図書〕(計 4 件)

- ①北村暁夫、他、東京大学出版会、友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史—古代秘儀宗教からフリーメイソン団まで、2010、301—339、
- ②北村暁夫、他、朝倉書店、朝倉世界地理講座 7 地中海ヨーロッパ、2010、325—331、
- ③北村暁夫、日本放送出版協会、千のイタリア—多様と豊穡の近代、2010、174、
- ④北村暁夫、他、明石書店、叢書グローバル・ディアスポラ 4 ヨーロッパ・ロシア・アメ

リカのディアスポラ、2009、233-245、

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

特になし

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

北村 暁夫 (KITAMURA Akeo)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：00186264

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし